

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	福山 尚
論文担当者	主 査 篠原 尚
	副 査 山本 新吾
	副 査 石戸 聡
学位論文名	Quantitative assessment of outer retinal folds on enface optical coherence tomography after vitrectomy for rhegmatogenous retinal detachment (裂孔原性網膜剥離術後の皺襞の定量)
論文審査の結果の要旨 裂孔原性網膜剥離は、網膜外層と網膜色素上皮の間で網膜剥離が起こる疾患である。多くは硝子体手術により復位が得られるが、術後に視機能の低下がしばしばみられ、その主要因は変視症である。申請者らは術後に生じる網膜外層の障害をenface optical coherence tomography (OCT, 多数の垂直断 OCTから画像処理して再構築した冠状断OCT) の画像を用いて定量評価し、変視との関連を明らかにした。対象は2016年10月から2017年8月までに兵庫医科大学病院で手術を受け、6カ月以上経過観察できた33例。術後1か月経過時点で、全症例に皺襞、すなわち網膜外層の隆起が観察された。皺襞のタイプは境界が明瞭なsharp foldと曖昧なdull foldとの2つに分類できたが、術後経過でsharp foldの境界も徐々に曖昧になっていった。Enface OCTの画像データを二値化して定量化すると、皺襞密度は術後6か月で術後1か月に比較して有意に改善した。変視量との相関を検討したところ、sharp foldの数との間に関連性はなく、術後1か月目の皺襞密度が高いほど術後6か月目の変視量の残存が多かった。 今回のenface OCTにより判明したsharp foldは、従来、outer retinal foldsとして知られていた網膜外層隆起をとらえたものと考えられる。術後経過においてsharp foldはより境界の曖昧なdull foldに移行しており、かつ、sharp foldとdull foldを合わせた皺襞全体の密度が術後の変視の残存に関わっていたことから、申請者らは術後早期の網膜外層の皺襞が変視の残存の予測因子になると考察している。 本研究は裂孔原性網膜剥離術後に生じる変視症の原因が網膜外層の皺襞形成にあること、その密度をenface OCTの二値化によって定量化することで予測因子になることを明らかにした意義のある臨床研究であり、学位論文に十分値するものと評価した。	